

集団の中で生きる動物としての人間の理性

伊勢俊彦（立命館大学）

人間は「理性的動物」である。しかし、理性的であることと動物であることとの関係はいかなるものであろうか。西洋の哲学的伝統の主流は、おおむね、人間に固有のものとしての理性を、人間が他の動物と共有する生命活動の原理と対立するしかたでとらえてきたと言ってよい。これに対して、人間の、とりわけ社会的行動を導く理性の働きを、人間の動物としてのあり方を土台としてとらえなおすことが、近年、たとえば A. マッキンタイアによって提唱されている。*(Dependent Rational Animals, 1999)* そのさい強調されるのが、共同体の中で相互に依存ながら判断し行動する人間のあり方である。社会における人間のあり方をこのように捉えることによって、「独立した合理的な個人の自由な自己決定」を当然の前提とする場合とは異なった人と人との関係、その中での行動の決定のあり方を理解することができる。私は、こうした、集団の中で生きる動物としての制約を帯びた人間理性のあり方の洞察に先行するものを、デイヴィッド・ヒュームおよびそれに連なる 18 世紀英国哲学の潮流のうちに探り、その現代的な意味を確認することを試みようと思う。

中でも、私が重要と考えるのは、道具的理性に支配された市場の秩序でもなく、ホップズ的な自然状態でもない、本能に基礎をもつと同時に社会生活の中で陶冶される行動原理による、狭い意味で合理的（rational）でなくても広い意味で理に適った（reasonable）協同のあり方である。諸個人の欲求を前提としその充足の最大化を図ることを「合理的」とする道具的理性観の源泉は、理性が単独では行動を指令し得ないというヒュームの議論であると言われる。これは、ヒュームの議論が実際にどう理解されてきたかという点から見れば、確かにそうかもしれない。しかし、ヒュームは、人間が単に自己利益を追求する存在であるとは見ていない。一つには、家族や親しい友たちの幸福に配慮することが、自己利益の追求と並んで人間の本性に備わった原理であるからであり、もう一つには、諸個人が自らの利益の冷静な計算によって行動を律することが常にできるわけではないからである。確かに、自他の所有の区別と適正な交換からなる市場的な秩序の確立は諸個人の利益感覚に導かれている。しかし、そのような秩序は、孤立した諸個人が単なる理性的計算にもとづいて形成することのできるものではなく、近しい者への配慮という本能的な原理による人間どうしの結びつきを土台としてはじめて可能なのである。

たとえば、われわれが幼い子どもや年老いた親はじめ、必ずしも自立できない社会の成員に対して持つべき配慮は、等価交換や自己利益の期待というような「合理的」原理によっては説明できない。このような配慮のあり方は、集団の中で生活する動物としてのわれわれの本能から出発すると同時に、具体的な社会生活のあり方に応じて陶冶され、しだいに「理に適った」かたちで自覚されていく。報告では、こうした「理に適った」感情のあり方の方向性を示すものとしてヒュームの道徳感情論を理解する可能性を中心に、義務論対帰結主義というような構図では見失われる思想史の伏流のうちに、人間が動物であるということを人間理性のあり方の根本的な制約としてとらえる発想の水脈を探ろうと思う。